http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.068　12/09/10

徒然草の世界

学級日誌に「私の運命は全て土・日にかかっている。土・日もはさまず４日もテストやるとは、嫌がらせですね。負けませんよ、フフフ…」と●●くんが書いているが、その通り、今回の期末は試験期間中に土・日が挟まれないから、実は昨日・一昨日の土・日がどれだけ活用できたかが、結構重要なのである…などと今ごろ書いても遅いが、まあ、そういうことで、明日からは４日連続の厳しい日々が続くが、それさえ終われば、晴れて？星陵祭の準備に邁進できるのだから、ぜひここは根性を見せてもらいたいところである。

夏休みが明けてから、古典の授業はずっと漢文ばかりやっていたから、古文の方を忘れてしまっているのではないかと心配である。しかも、古典は最終日ということで、完全にエネルギー切れ状態で臨むことになりそうだ。中間考査が思わしくなかった諸君、ここは頑張り所である。

古文の考査範囲の「猫また」は、疑心暗鬼の結果、飼い犬を猫またと誤解する話だし、「丹波に」の方は、何か尊いことがあるに違いないと思い込んでいる僧が、子供のいたづらに価値を見出してしまう話である。ともに「思い込み」がテーマになっていて面白い。入門期だから、授業ではどうしても文法の話がメインになってしまうが、そんなものを離れて読むと、『徒然草』は意外に面白い。

美意識について論じた「花は盛りに」も、私たちが何気なく身につけている感受性を言語化してくれているわけで、将来君たちが国際社会で活躍するようになった際、日本の美意識などが話題になった時に、いろいろと応用が利く話である。勉強の合間に、あの話を要約して英訳したらどうなるだろうか、どんな風に説明したらいいだろうか、なんて考えることも、理解を深める一助に違いない。

ちなみに、ベネチアでゴンドラに乗った時、「今、日本の原発はどうなっているんだ」とゴンドリエールから話しかけられた。彼らは観光立国の最先端を担っているわけで、今では操船技術にしろ教養にしろ、厳しい試験に合格しないと、あの横縞のユニホームが着られない。だから、三カ国語くらいを操るし、それなりの教養を備えているわけで、彼らからそんな質問を受ければ、それに英語でしっかり（日本を代表して？）答えることが求められるのである。（主人が答えました…笑）

話がそれたが、『徒然草』の中に「何ごとも完全に整っているのは悪いことである」とする第82段「うすものの表紙は」という話があって、その中に、内裏を造る際にも、必ず完成させない部分を残すことになっているというエピソードが紹介されている。つまり、完成すると、あとは「滅び」を待つだけになるから、敢えて完成させないということなのである。松任谷由実が荒井由実時代につくった名曲に「十四番目の月」というのがある。次の日からかけてしまう満月よりも、満月一歩手前の「十四番目の月」で（私たちは）いましょうね♥という歌である。ズバリ、「うすものの表紙は」の世界である。